

八神はやてのでい～ぶいでい～＝ハーメルン用ディレクターズカット版＝

YU—Hi

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

企画・構成・演出・主演 八神はやて

ミッドチルダのローカルメディア局チャンネル1で放送された

八神はやてのばんぐみ からの 特別編集版！

今回は、機動六課の同窓会を兼ねた

人間の記憶の不思議に迫る「人間観察実験企画」。

実はメディア番組の撮影だなんて一切聞かされずにやってきた元

六課メンバー

そこにはたくさんの料理が用意されており、宴会が開始されるのだが……

はでに 八神はやて の 実験は始まっていた！

彼女らは超難解な間違い探しにチャレンジさせられる!!

!!この宴会の食事代の支払い!!をかけた悪魔の企画開始!!

かつて某所にてオフセット本発行された一冊が、

ハーメルンに合わせて編集したディレクターズカット版で登場！

………キャスト………

八神はやて

高町なのは / フェイト・T・ハラオウン

シグナム / ヴィータ

ラインフォース・ツヴァイ / ヴァイス・グランゼニツク

スバル・ナカジマ / ティアナ・ランスター

エリオ・モンディアル / キヤロ・ル・ルシエ

アルト・クラエツタ / ルキノ・リリエ

ナレーシヨン：高町ヴィヴィオ

.....

目次

序。	1
本編・破【A】	8
本編・破【B】	17
本編・破【C】	26
本編・破【D】	34
本編・急	42
おまけ・後日談・休日の午後二時	51

序。

前置き。

初めましてドクター八神の助手の高町ヴィヴィオです。いつからはやてさんがドクターになって、私が助手に成ったのかよくわかりませんが、とりあえずそういうことらしいです。

……あの、本当に台本通り進めたらお小遣いくれるの？
うん、まあ……はやてさんがそこまでいうなら……

こほん。では気を取り直しまして。
本作は、ドクター八神が、自分の脳はどこまで信用出来るのか——というテーマで行われた実験風景を収録したものです。

機動六課のメンバーを呼び寄せて、はやてさんが大盤振る舞い。
何も知らずに和気藹々と食事しているみんなにイタズラを仕掛け
て……って、

それ、ヴィヴィオ呼ばれてないんだけど。
なのはママとフェイトママも参加したの？
ずるーい！ 何で呼んでくれなかったの？

……イタズラ……？ あー、それもそうかもだけど……でも……
え？ その分、お小遣いに色つくの？
それなら……まあ……

こほん。
そう言うわけで、良い感じにみんながテンション上がってきた頃に
仕掛けられるはやてちゃんのイタズラ。

二つのチームに分かれて、負けたチームが全額自腹。
はやてちゃんのおごりだとばかり思ってた両チームが凍り付くわけ
です。

どんなイタズラかは見てからのお楽しみと言うことで。

何はともあれ、普段は見ることの出来ない元機動六課メンバーの仲良し姿と、そしてどちらかというトメインである疑心暗鬼でギスギスした姿をご堪能ください。

それでは、VTRどうぞー。

……はやてさん、ギスギスした姿って流していいの？

いいんだ。そうなんだ……そっか。

序。

さてさて、はやてさんに誘われてとあるお店に元六課メンバーが集まってきたのは前置き通り。

イタズラ好きのはやてさんの大盤振る舞いに最初はみんな、色々と疑ってた見たいですが、それも時間と共に解消されていって、なんだかんやと、何で私も混ぜてくれなかったんだーって、思わず騒ぎたくなるくらい楽しい空気になってきた頃、唐突にはやてちゃんが告げました。

「ちよつと、外の空気吸いに行かへん？」

まあ、なんといいですか……みんなの顔が、しまった——やっぱり罨だったんだコレ——みたいな形に変わってしまいますが、もう後の祭りです。

ところが、外へ出ても特に何も起きず、みんなちよつと困ったような表情になっています。

「——まあそんなワケで、いったん箸を置いて外の空気を吸いに来たワケなんやけれども」

お店のテラス席へとやってきて、フェンスに寄りかかりながらはやてちゃんが笑いました。

「はやてが奢るなんていうから、色々疑っちゃったけど、本当にただ

の懇親会というか同窓会みたいなのだったんだね。ごめん」

どうやらフェイトママはちよつと疑ってみたいなんだけれども、どうやらその疑いも晴れたみたいで、爽やかに笑っています。

ダメだよフェイトママ、はよてちゃんの笑顔に騙されちゃ——つて、Vに言つて意味はないのですが、思わず言いたくなっちゃいます。「まあ確かにはよてちゃんからのお誘いとはいえ、ちよつと羽振り良すぎるから疑いたくはなっちゃうんだけど」

「ひどいなー、フェイトちゃんもなのはちゃんも。二人ともどういう目で私のコト見とるんやもう」

いやいや、なのはママの言い分はわりあい正しいとヴィヴィオは思いますけれども。

「つていうかはよてさん。何でわざわざ外へ来たんですか？ 個人的にはずつと食べていたんですけどー」

「スバルあんたねえ……」

残っているお料理やこれから運ばれてくるお料理が気になってそわそわしてるスバルさんとそれを窘めるティアナさんというのはいつもの光景だったりします。

「まあ確かにここへ来た意味よく分からねーよな。正直、あたしもずつと食べてたいし」

ヴィータさんの言う通り、みんな、一応言われた通りはよてさんと一緒にテラスへとやってきたものの、本心はずつとご飯を食べていたかっただけです。

気持ちには分かりますが、そのまま食べていられるとはよてさんがイタズラ出来ない……きつとそんな所なんだと思います。

その証拠に——

「なんや……みんなに一つ、言っておかなアカンことがあるー」

はよてさんは、その目にどこかの元ジョッキーのような漆黒の炎を宿し、口を上弦の細い月のように歪めました。

直感的に、その場にいた人達が何かを悟ったようです。

ついでに言うなら、フェイトママの表情はうっかり信用した自分が馬鹿だったと後悔してるようにも見えます。

「奢るって言うたけどな。私のお財布からお金出すとは一言も言っ
へんよ?」

『え?』

とんでもないはやてさんの言葉に、全員が思わず絶句。

——うん、この絵はこの絵で珍しいかも知れません。本人達の心中
はともかくとして。

さつきはこのシーフードレストランに呼ばれなかったコトやら、美
味しそうなご飯が食べられないコトやら愚痴ってしまいましたが、今
なら言えます。

ヴィヴィオ……この場になくてよかった、って。

「えっと、はやてさん……それってどういう意味なんですか?」

引きつった——聞きたくないけれど、それでも聞かなければいけな
いって自分に言い聞かせてるような——顔でキャロさんが問いかけ
ると、

「おお。キャロ、ええ質問や」

「え?」

はやてさんはうんうんとうなずいてから、特に答えずに歩き出しま
す。

「はやてさん!?!」

それから振り返ってみんなにウインクを一つしました。

「ほな、テーブルに戻ろうか?」

可愛く言っただけ魔化してるつもりかもしれませんが、どう見ても悪
魔のウインクです本当にありがとうございます。

そうして、戻ってきましたました大人数用のパーティールーム。

みんな不安そうな顔をして、さつきまで座っていた自分の席へと戻
る……その途中のことです。

「あ、なのはちちゃんとフェイトちゃん席かわろうか?」

「え? ……うん」

「……いいけど……？」

「いったいこの席替えに何の意味があるのでしょうか？」

「ほな、こつちがなのはちゃんチームで、そつちがフェイトちゃんチームな」

「チームツ!?!」

みんなの顔がどんどん不安色に染まっていくさまが楽しくて仕方がないといった様子のはやてさんは、みんなの視線の受けながらピツと人差し指を立てて言います。

「チーム対抗戦や。んで、さっきのキャロの質問の解答やけどな——この支払い、これからやるゲームの負けチーム持ちちゆうことなんでよろしゆうに」

『ええええええええッ!』

もはや悲鳴に近いみんなの不満の叫びに——……なんでそんな楽しそうなんでしょうか、はやてさん。

「で、でもそれだとはやてさんだけズルくないですか!」

「そ、そうツスよ! アルトの言う通り、人数的に一人あぶれてるはやてさんはどーするんすか?」

アルトさんとヴァイスさんの言うことももつともだと言うようにはやてさんはうなずくと、

「もちろん、それが不公平や言うんは承知の上や。

その辺はルール説明も兼ねてちゃんと言うんで安心してくれて構へんよー」

そんなワケでルールのお話です。

今回、はやてさんが超難問クイズを一問だけ出題。

それを両チームが交互に解答していく形になります。

シンキングタイムは十五分。

解答に対してチーム内で意見が分かれても必ず一つに絞って下さい。
い。

三回の裏が終わるまでに正解したチームが勝ちになります。

はやてさんが自信を持ってお送りするこの難問。

どちらのチームであろうとも二回の表までに正解出来たなら、食時代の全額をはやてさんが支払います。

以上。ヴィヴィオのルール説明でしたー。

「——ちゆうんがルールなんやけど、理解した？」

「まあちゃんとはやてにもリスクがあるなら、あたしは構わねーけどよー」

「ヴィータちゃんは結局何でもいいからご飯が食べたいだけじゃないですかー?」

「悪いかよリイン」

何やら微笑ましくじゃれ合い始めた二人を横目に、他のメンバーはこのルールで良いかどうかを確認しあいます。

……どうやら、OKみたいです!

「ほんなら、先攻後攻決めようかー。なのはちゃんとフェイトちゃんでジャンケンや」

「それじゃあ——」

「うん」

じゃんけん……ぽん!

なのは……グー。

フェイト……チョコキ。

「にやはは勝ちー」

「負けちゃった……」

「そんなわけで、なのはちゃんチームどないするー?」

なのはママはチームの所に戻ると、軽く相談し合い……

「じゃあ、とりあえず様子を見たいから後攻で」

「了解や。ほんなら出題するよー。準備はええかー?」

はやてさんの言葉に、全員が神妙にうなずきます。

「よっしや——問題や」

問。

先ほどテラスに出る前と、戻ってきた後とで、このパーティー

ム内に一つだけ増えたモノがあります。それはどれでしょう？

「……まあ、ようは間違い探しやね」

あまりと言えばあまりの問題にみんな頭を抱えますが、了解しちゃった以上はゲームは辞めることは出来ません。

重ねて、ヴィヴィオはこの場にいらなくてよかったなあつと心底から思います。

「後攻のなのはちゃんチームは私と一緒に別室のモニタールームへGOや。

ほんなら、元機動六課対抗超難解間違い探しゲーム……プレイヤー！」

なにはともあれ、はやてさんが仕掛けたとんでも間違い探しスタートです。

本編・破【A】

「それにしても、はやてさんも手の込んだコト考えますねー……」

呆れるルキノさんに、ヴィヴィオも大いに同意します。

「勝てばタダでご飯が食べられるんだからがんばらないと!」

「だな!」

「です!」

ヴィータさんとスバルさんの大食いコンビ、そしてリインさんはかなりノリノリなのですが、フェイトママとティアナさんの執務官コンビはそうでもないみたい。

「フェイトさん……はやてさんに奢らせるのって——」

「うん、はやてのコトは考えずに素直に勝つことだけを考えよう」

二人が神妙な顔をしてうなずき合っていると、

「なんでですか?」

ルキノさんが首を傾げています。

「はやてさんに奢らせるチャンスが、先行だから二回もあるじゃないですか」

「その考え、まんまとはやての罠に掛かってるよルキノ」

「ええッ!」

「だろうな。説明してやりたいのもやまやまだけど、別室のモニタールームでなのは達がこっちの様子見てるし、音声だって拾ってるだろうから……ま、後だな」

釈然としない顔のルキノさんですが、モニタールームのコトもあつてか、それ以上は特に聞こうとしないようです。

「ではとりあえず、細かいことは後にして間違い探しを始めるですよー」

リインさんの言葉にみなさんうなずくと、本格的な搜索開始となりました。

一方のモニタールーム——

「フェイト達の言葉の意味……どういうことでしょうか主?」

「なあシグナム……このゲームの趣旨、理解しとる？」

真顔で尋ねてくるシグナムさんに、はやてさんは苦笑を浮かべました。

……たぶん、シグナムさんはまったく理解できてないと思います。理解できてたらはやてさんにそんな質問はしないかと。

「二応このゲーム、シグナム達の対戦相手はフェイトちゃんチームだけやのうて、私もやからな？」

そういう質問をするならチームメイトにするようにと、はやてさんはシグナムさんに言います。

「まあ勢い納得しちまいましたけど、じっくり考えると結構はやてさん有利ルールっすよね」

「そうなのエリオ君？」

「いや、僕もちよつと分からないかな……アルトさんは？」

「あはは……ごめん、私もちよつと……」

そんなやりとりに、なのはママとヴァイスさんは目を見合わせて、「戦力差がありすぎるツツ!!」

二人揃って頭を抱えましたとき。

——いやあ、チームの総食事量もなのはママチーム負けてるもんね。

このゲーム、こっちのチームはワンチャン確認するまでもなく、とっても不利かもしれません。

申し訳なさそうな、エリオさんとキャロさんとアルトさん。

やっぱり良く分かってないシグナムさんに、頭を抱えるなのはママとヴァイスさん。

そんな五人を見ながら、はやてさんは楽しそうに笑っているのです。

が、がんばれ！なのはママチーム！

画面戻ってフェイトママチーム——

「しっかし……お誂え向きに色々飾ってある部屋ですよね……」

「あはは……たぶん、それを狙ってこの部屋なんだろうけどね」

このシーフードレストランの前オーナーさんは、なのはママやはやてさんと同じ地球出身の人らしく、パーティールームのコンセプトは日本の海の家、らしいです。昼とかはないですが。

室内にあるアイテム数は、テーブルの上のお料理含めておよそ千五百点弱。

壁には浮き輪やら、紙に一品づつ手書きで書かれたお品書き、安物——というかおもちゃ——のシュノーケルだとか、壁やら帽子掛けみたいなものに色々と飾ってあるんです。

さらには本来の建物の壁の手前をスノコのような板でぐるっと囲んで木造風にしてありまして、その木壁には、木目や年輪まで付いてる始末。

しかも簡単に取り外しが出来そうな形なものだから、この辺りはかなり怪しそうです。

「リインさん」

「なんですルキノ?」

「あの天井の梁においてあるサイン色紙って、ありましたっけ?」

「んー……」

ルキノさんが示すサイン色紙を見上げながら、リインさんが眉間に皺を寄せますが、どうにも思い出せないみたいで……

まあ普通はそんなの食事中に気にしたりしないですよー……。

「あたしはそっちのシュノーケルが、赤色なのが気になるんだよなー……なんか、緑色だった気がしねえ?」

「うーん……そう言われるとそんな気が……」

ヴィータさんと一緒に首を傾げるスバルさん。ヴィータさんも口にはするものの、あんまり自信はないようです。

「ちよつとまづいかな」

「そうですね。どれもこれも怪しく見えてきました」

そりやまあ、完全に食事とおしゃべりにみんな集中してたわけですから、部屋の内装までちゃんと覚えてたりはしないですよね……。

「ここはあれだな。フェイトとティアナの執務官としての洞察力と観察力に期待だな」

「さんせえーい！」

食事さえ出来ればいいや組は完全投げやりモード入りましたー
……って、でもちよつと早すぎる気が……。

「わ、わたしも、それでー……」

そんな二人に、ルキノさんも申し訳なさそうに加わります。

「じゃありンも！」

「リインさんはダメです」

「っていうか、リインは捜査官補佐なんですから、こっち側だよね？」

反論は許さないと言わんばかりの執務官コンビの迫力に、うな垂れるようにリインさんは大食い組から、執務官組へと移動します。

「もちろん、スバルとヴィータとルキノもちゃんと協力するコト。間違ったら文句言える側に移動しようなんて虫の良いコト、させないよ？」

「ちえ……バレバレか」

「ええッ!? ヴィータさんそんなコト考えてたんですかッ!？」

「わ、わたしは別にそんなつもりじゃ……」

何かもうグダグダです。見てる分には面白いんですけど、本人達はきつと大真面目なんですよねー……。

モニタールーム。

「あ。あのサイン色紙は最初からありましたよ」

「そうなの?」

「はい」

自信たつぷりにうなずくキャロさん。みんなを納得させるために、ちゃんと根拠も説明します。

「さっき()飯食べてた時、ちよつと目に入って。誰の色紙かなあつて考えてましたから」

ふむ、とヴァイスさんはうなずくと、人差し指をピツと立てました。

「向こうがサイン色紙を選ばなかったら、あのサイン色紙使って一芝居とうぜ」

「ヴァイス先輩、それどういう意味ですか?」

「ようするに、私達も色紙が怪しいって会話をして、二回の表のフェイトちゃん達の解答を誘導しちゃおうってコト」

ヴァイスさんの代わりにアルトさんの質問に答えたのは、なのはママ。だけどアルトさんは首を傾げます。

「でも、それだとはやてさんに奢らせるコト出来なくなっちゃいますよ？」

「それに関しちゃ、フェイトさんのセリフそのまま使って答えてやるよ」

そう笑ってヴァイスさんがなのはママにウィンクすると、なのはママは茶目っ気たっぷりにフェイトママの声マネしながら答えました。

「その考え、まんまとはやての罠に掛かってるよアルト」

うーん……物真似的には六十八点。

「あの……そのどこが罠なんですか？」

どうしても分からないといった様子のエリオさんに、テストの答えを解説をするような口調でなのはママは言います。

「私達が正解した時のメリットって、別に一回目で解答しようが、二回目に解答しようが、三回目に解答しようが同じでしょ？」

はやてちゃんに奢らせるっていうコトは、フェイトちゃんチームのデメリットを消すだけであって、私達にとっては何のメリットもないんだよ。確かに二回の表でフェイトちゃん達が答えてくれれば私達も助かるけどね」

「だけだよ。こっちの手札を向こうに見せても、向こうが二回の表で正解するかどうかは分からないわけだ。そのヒントが間違ってる可能性だってあるわけだしな。」

「けどその見せた手札がちゃんとヒントになってて、三回の表で向こうが成功したらどうする？ 俺達の負けだろう？」

「ええつと……それってつまり、私達が勝ちさえすれば、別にフェイトさん達が助かる助からないは関係ない——ってコトですか？」

「そう言うコトだな。ちゃんと理解出来てるじゃないかキャロ」

ヴィヴィオ的に補足するのであれば、色紙のお芝居を無視してフェイトママ達が正解しても、それが二回目ならばなのはママ達は痛くな

いし、その後の三回目で色紙を選ぶ確率が上がるのなら、さらにこちらのチームには好都合ってことなんだと思います。

まあ、正解さえしちやえばダメージを受けるのがはやてさんだろうが相手チームだろうが構わない、というのはどっちのチームにも言えることなんですが。

「そう考えると、確かにはやてさんに奢らせる為にがんばろうとして、焦れば焦るほど逆に負ける可能性が上がるわけですね」

「そっかー。なのはさんとヴァイスさん、この短い間にそこまで考えてたんですねー」

ついでに言うなら、フェイトママとティアナさん、それとヴィータちゃんは確実に。リインさんも気付いてたんじゃないかなーって思います。

「うーん……みんな鋭いなあ……」

苦笑するはやてさんですが、その苦笑がとても芝居がかつてる気がするのはヴィヴィオの疑心暗鬼のせいでしょうか？

「ところで、シグナムは会話に混ざらんでええの？ このままだと今回は影薄街道まっしぐらやん？」

「それはそうなのですが……やはり、この手の話になるとどうにも役に立ってる気がしないもので」

「なんや、勝負事好きのシグナムがらしくないなー」

「そうそう。今の話だって、キャラが理解するよりも先に理解してたんでしょ？」

「まあ……一応な」

「それなら問題ないっすよ。せつかくのお遊びなんだから、姐さんもちやんと楽しまないと」

はやてさん、なのはママ、ヴァイスさん。それから他のみんなの無言ながらも、一緒に楽しみましようオーラを受けて乗り気でなかったシグナムさんもなんだかその気になってきたようです。

「まあ、その……なんだ。やるからには勝つぞ。負けは性に合わないのな」

「もちろん」

なのはママチームは一斉にうなずいて団結します。

それを一步引いたところで、

「そのくらい盛り上がりたってもらわんと、こっちも面白くないからなー」といった様子ではやてさんはニヤニヤしてました。

……絶対、他にもドツキリ仕掛けてる顔ですね。困ったものです。

そして画面はフェイトママチーム――

じーっと……スバルさんがテーブルの上にある、お魚のフライが載っているお皿を見つめています。お腹すいたのかな？

白い大きなお皿に大きめのサラダ菜を絨毯のようにおいて、その上に千切りキャベツを薄く敷き詰めて、その上に開いたお魚に衣を付けて揚げたのがおいてあります。

たぶんいっぱい乗ってたんだと思いますが、今はもう二匹しか残ってません……うん、お皿の真ん中にのったタルタルソースと一緒に……きつと衣はサクサクで、白身はしつとりで……ううつ、やっぱりドツキリが仕掛けられていたとしても行きたかったかも!？」

「どうしたのスバル？ お腹すいたの?」

そうだよね。スバルさんが料理見てたらみんなそう思うよね。

「いやー……それもあるけど――このフライ、私とエリオで全部食べちゃってた気がして……」

ルキノさんの問いかけにスバルさんは神妙に答えます。

「そういや……それ、あたしも食べようとしてだいぶ減ってたから諦めた記憶が在るな。あんまし残ってねーから、エリオとスバルが食べちまうだろうと思ってさ」

二人の会話を聞いていたらしいヴィータさんの言葉に、フェイトママとティアナさんの執務官コンビも思わず顔を見合わせます。

「ヴィータさん! その時、何匹残ってたとか覚えてませんか?」

「残念ながら」

首を横に振るヴィータさんを横目に、フェイトママはスバルさんに

訊ねます。

「リインとしては、あのサイン色紙が怪しいんですが」

交換等しやすいし、風化したように加工するのも簡単だからって
うのがリインさんの弁。

そう言われると確かに、一番あれこれ出来そうな気もするけれど
……。

「スバル。あんた、このフライが答えだっていう自信ある？」

「うーん……」

「あたしは結構イイ線いってると思うけどな」

悩むスバルさんを後押しするようにヴィータさんが言います。

「他のみんながこれで行こうって言うなら、一回目の解答はこれでい
い気がするけど……どうだ？」

その問いかけの対象は執務官コンビ。リインさんとルキノさんも
別に構わないとうなずいていますし、そうなる——

「じゃあ、とりあえずそれでいこうか」

「そうですね。向こうのチームも一発解答はないでしょうし」

「まあ食べ物系だったらスバルは結構鋭そうだしねえ」

「そんなワケだから、はやて。こっちの最初の解答が決まったよー！」

はてさて、なのはママチームと共にモニタールームからパーテイ
ルームへと移動してきたはやてさん。

「ではでは、フェイトちゃんチーム。答えをどうぞ」

はやてさんに促されて、スバルさんが一歩前に出てさつきだした結
論に指を差します。

「このフライが！ 一匹！ 増えているツ!!」

何やらテンションが高い——というか、妙な自信に満ちてる気がし
ないでもありませんが、

「【フライが一匹増えている】は……」

果たしてその解答は——

「ふふー」

——と、はやてさんは手を交差させてバツテンを作りました。

フエイトママチーム、残念。

「まー、最初だしね」

「はい。ティアナの言う通りです。まだまだリイン達にチャンスはあるですよ！」

「ふふふ……っ！ それはどーっすかねえリインさん」

失敗にメゲずに明るく行くこうとするフエイトママチームに、ヴァイスさんが不敵に笑います。

「むむむっう、ヴァイス……どういう意味ですか？」

「む。ヴァイスさん、それどういう意味ですか？」

「リイン、ルキノ。乗っちゃダメだよ」

同時に反応するお二人をフエイトママが宥めると、なのはママチームにターンを譲り、はやてさんと共にモニタールームへと消えていきました。

さてさて、ここからはなのはママチームの攻撃開始です。

でも、その前に——あとがきにて、ドクター八神からのコメントでーす。

本編・破【B】

記憶なのか妄想なのか——脳に仕掛けられた、知的ドツキリ。

一回の裏、なのはママチームのターン開始です。

果たしてどんな妄想が飛び出るのか——ツ!?

……ってノリノリでテンションを上げつつ、でもちよつと酷くない？
って思ったりしたのはナイショです。

さて、気を取り直してなのはママチームです。

思い思いに室内を見て回っているその途中、ふとシグナムさんが、足を止めてじーっとテーブルの上に視線を落としています。

「思ったのだが」

「どうしたんスかシグナム姐さん」

「……料理好きの主が、料理を利用するのか——と、思ってたな」

「ふむ」

その言葉にヴァイスさんはちよつと考え込みます。

他のメンバーの耳にも入っていたみたいで、少し考えてから、結論ができました。

「テーブル系はないかも」

「ですね」

ヴィヴィオ的には、料理が一つ増えてるくらいは、はやてさんならやっても不思議じゃない気がしますけど……うーん……。

ま——なんであれ、無いんですけどね。間違いなんて。

「それに、もしかしたら、隠し撮りかなんかしてて、どつかのメディアと協力して俺達をからかった映像を後々データ化したり放映したりとかあるかもしれねえっすよ」

お、ヴァイスさん鋭いッ！

「にやはは……完全には否定出来ないってのがまた……」

モニタールームの方では、はやてさんが、

『心外やなー』

などと呟いています。即座にティアナさんにツツコミを入れられていました。さすがティアナさんです。ツツコミに馴れてますねッ

！
「でも、それを考えると画面写りの関係上、やっぱりお料理とかなさそうですよね」

「だねー、キャロ。わたし的には、こういうサイン色紙とか怪しいと思うんだよ」

「あれですよね。この下を通ったときとか、画面上に『解答三十センチ付近』ってテロップが出たりとか矢印がでたりとか！」

「そうそうエリオ。それぞれ！」

アルトさん、キャロさん、エリオさん、ご心配ありがとうございます。でも、視聴者さん的にはもっと面白い楽しみ方をしていますので。

「そういう分かりやすいところが、やっぱり怪しいのかな？」

思わずなのはママまで納得してしまっていますが、ごめんなさい。そんなコト全然ありません——っていうか、そもそも間違いないんです、本当にごめんなさい。

「そうすると、やっぱりこのサイン色紙とか怪しくないつすか？」

先ほどモニタールームで話していた通り、フェイトママチームへの印象づけ作戦をヴァイスさんは開始のようです。

「そうなのか？ キャロが先ほど見覚えあると言っていたようだが？」

……って、シグナムさん、さっきの話聞いてましたッ！

「え、えっと……そうなんですけど、やっぱりそうでもないような気がします……」

キャロさんが慌ててそれをフォローしつつ、他のメンバーも話を合せ始めますが——

モニタールーム。

「今のシグナム、間違い無く素だったね」

「ああ」

「はい。間違い無く」

「リインもそう思いました」

「つまり……」

「あのサイン色紙は選択肢か外れたってコトですわね♪」

なのはママチームの作戦、開始と同時に大失敗です。

「おかしいな……シグナムやって、なのはちゃんとヴァイス君の一芝居とうつつちゆう話、ちゃんと参加してたはずなんやけど」

「そこはほら……はやて、あれシグナムだし」

「ですねーシグナムですし」

「ああ、シグナムだしな」

うあ。みんな結構ひどい。

「ああ……シグナム……。君は今……泣いてええ……」

神妙なセリフですが、笑い堪えてるのが見え見えですよはやてさん。

パーティールーム。

さてさて、シグナムさんの迂闊なセリフであつさりとバレちゃったんですが、うまくキャロさんが誤魔化してくれたと思ひ込んでしまっているのはママチーム。

持ち時間の半分近い七分も利用して、印象づけ作戦続行中です。

ちなみに、シグナムさんはアルトさんに引つ張られパーティールームの片隅に移動しています。

どうやら、アルトさんから色々と説明を受けたらしく、頭を抱えつつ謝っています……。まあ、今更ですね。

「まあ、でも色紙だけに拘ってないで、一応他のところにも目を向けてみようよ」

かなり自然な流れで、お芝居を切り上げたなのはママチーム。

でも、もうバレバレなんですよねー……。

「あのー……僕、あの郵便受けが気になってたんですけど」

そうしてエリオさんが差したのは、部屋の片隅にある赤いレトロな郵便受け。

「あそこに新聞が入ってるじゃないですか。でもあれ、あつたか

なーって」

ふむ——つと、一つアルトさんがうなずいて、それを郵便受けから抜き取ります。

「確かにちよつと怪しいかもですねー……なにせ、この新聞の日付、今日のですし」

「ふむ——レトロな雰囲気のお店にはすぐわない気はするな」

アルトさんが手に取った新聞を横から覗きながらシグナムさんもうなずきます。

他のメンバーも周囲を見渡しつつ、それでもピンと来るものが無かったのか——

「それじゃあ、そろそろ時間だし、決めちゃおうか」

そう言つてなのはママが手に取ったのは、先ほどのサイン色紙。

「その色紙か、新聞か……すね」

ここへ来てダメ押しとばかりにもう一回サイン色紙を話題に入れる辺り徹底していますが、でももうバレちゃってますから。

モニタールーム。

「あはは。なのはちゃん達も、ようやるなー。バレてるのに気付いてへんのやから、しゃーないんやろうけど」

笑っているはやてさんの横で、スバルさんが何やらマジな顔をしています。

「どうしたのよスバル?」

「あ、うん……ティア。ちよつと思っただけだよ」

「何よ?」

「あれ、本当にこつちを騙すためのお芝居なのかなーって……」

「え?」

完全にお芝居だと思つて覗いていたフェイトママチームに、スバルさんの一石投じました。

「いや——ほら、こつちはフェイトさんやティアみたいな執務官組がいたし、それでなくとも、捜査慣れしてるリインさんとか、洞察力の

高いヴィータさんとかの最強布陣でしょ？

ルールのリスクとリターンに気付く可能性はすごい高かったワケで……でも、向こうってエリキヤロにアルト。それに、失礼ながらシグナムさんなワケで」

「さすがになのはとヴァイスは気付いてるだろうよ」

ヴィータさんの言葉にうなずきながらも、スバルさんは続けます。「気付いた上で、それでもどっちかだけが奢りになるような状況を作りたくないのかもですよ。なのはさん優しいし」

……なのはさん優しいし——その言葉に、フェイトママがぐらりと傾いたのをヴィヴィオは見逃しません！

「いやいやいやいや、こういうコトにあんま口出しするんは反則やと思うんやけれども、言わせてなースバル」

何やら無然とした顔で、はやてさんが割って入ります。

「それやったら、私の全額負担は問題あらへんっちゅうんか？」

「まあ、もともとははやてさんのお誘いですし——何よりほら、なのはさんって、悪い人には容赦ないじゃないですか」

その発言ははやてさんを悪い人だと切って捨てる発言だったりしますが、きつとスバルさんは気付かずに言ってるんですよ……。

「ああ、確かに……」

何かを思い出したのか、ティアナさんの体が一瞬だけぶるつと震えます。

「でもきースバル。それだとシグナムさんの発言をフォローするキャラとか、シグナムさんに説明するアルトの行動とか、矛盾しない？」
「いや、案外その辺も折り込み済みなのかもしんねーな。深読みしすぎかも知れどよ、色紙だけじゃなくて新聞も最初から怪しいとか思ってたのかもなー」

あれ？ ヴィータさんも、なのはママは優しいって言葉に傾いちやつてませんか？

確かになのはママは優しいママですが、勝負事に対してはわりと勝ちを狙うタイプじゃないですか？ 結構な負けず嫌いさんだと思うんですけど。

あれ？ ヴィヴィオの思い違いかなー？

「つまり、あの色紙芝居は、なのはさんからの、怪しい場所を示すメッセージ？」

「うーん……まあ、みんなの話を総合すると、ルキノの結論なのですかー……」

唯一（？）冷静なりインさんが、こめかみに指を当てて、眉を顰めています。

「私は……なのはを信じるよ」

えええっ！ フェイトママツ!! 信じるって言葉を使うタイミング間違えてませんかーッ!?

なのはママってすっごい負けず嫌いだってコトを忘れてません？

そもそも、これが間違い探し勝負だって前提を忘れかけてませんか？

「そうだな。ま、そういうコトにしといてやるか」

いやいやいやヴィータちゃんもッ!!

そもそもなのはママがそういうコトを考えていたとしても、色紙が不正解だつていう可能性がありますよね!?

「じゃあ、次はそれで行きましょうか」

「つたく……アンタつてばほんとお気楽なんだからー」

あの……ティアアナさん。口では何のかんの言ってますけど、スバルさんの発言を肯定してますよね？

えー？ いいのー？ フェイトママチームはそれでーッ!?

「……………」

「どうしたですかルキノ？」

「いえ——その……いまいち釈然としなないといえますか……」

「あ、あはははは……実はリインもです」

よかった……。二人は正気みたいです。

「でもこのノリはー……」

「はいー……逆らい辛いですよねー」

何だか諦めの境地っぽい顔のお二人。気持ちは分かりますけどね。

それにしても、恐るべきは【なのはママ^{だいすき}大好き^菌】。

フェイトママとスバルさんは元より、まさかヴィータさんとティア

ナさんにまで感染していたとはッ!

……でも、ヴィヴィオもママのコト大好きですので、きっと感染患者ですよー♪

パーティールーム。

そうして、なのはママ達の相談も終わったところで、フェイトママチームとはやてさんをパーティールームへと呼んでの、解答です。

「それじゃあ、なのはちゃんチーム。解答をどうぞー」

「はい。その郵便受けに入ってる新聞です!」

そう答えるママに、

「では、【郵便受けに入っている新聞】は……」

はやてさんはちよつとだけ溜めてから――

「残念!」

両手をクロスさせてバツテンを作ります。

まあ、答えがないんだから当り前ですよー。

そんなワケで、攻守交代です。

そして、両チームがすれ違うその一瞬、なのはママの呟くような声をマイクは拾っていました。

「スバル……よろしくね」

「え?」

意味深なすれ違い。

そしてなのはママは一瞬だけ振り返り、フェイトママチームに意味ありげな笑みを見せると、モニタールームへと入っていききました。

いったい、あれはなんだったのでしょうか?

何はともあれ、二回の表、開始です。

「じゃあ、これで」

『いやいやいやいやいやいやいやいやいやー!』

躊躇わずに色紙へと向かったフェイトママに、リインさんとルキノさんが即座に制止します。

——つていうか、他の人は誰も止めようとしないうつていう。

「フェイトさん！ 一応時間はあるんですから、もうちよつと他を見るですよ！」

「でも、なのはが……」

「そうですよー、なのはさん、すれ違い際に私によろしくとか言っていないんですけどしー！」

「じゃあ、これだねスバル」

「はい！」

「あああああああああああああああッ！」

なんかフェイトさんとスバルに理屈が通じなくなってるうッ!?」
頭を抱えるルキノさんを余所に、かなり切羽詰まった様子で、リインさんが周囲を見渡しまくってます。

そして、ふとテーブルに目を向けた時に何かに気が付いたようですが——

「はやて、なんかOKみたいだからよろしくう」

リインさんが何か言おうと顔を上げる前に、ヴィータさんがはやてさんと呼んでしまいました。

両手を床に付き、うな垂れるリインさんやルキノさんの二人をフェイトママとスバルさんは不思議そうな目で見ていましたとき。

……ちなみに、ティアナさんは、二人の様子を見て正気に戻ったみたいですけど、もうどうしようもないくらい手遅れな気が……。

周りに気付かれないように頭を抱えているようですが——残念、ヴィイヴィオにバレバレでしたー。

そんなワケで、フェイトママチームの二回目解答！

「それじゃあ、フェイトちゃんチーム。正解をどーぞ！」

うな垂れている三人を捨て置くように、ピシッとフェイトママとスバルさんはサイン色紙を指差します。

「サイン色紙ツ!!」

さて、その解答は——

「ぶぶぶー」

溜めすらせずに、はやてちゃんはバツテンを作ります。

あつてるハズありませんよねー。だって答えないですもん。

さてさて、二回は早くも攻守交代です。

本編・破【C】

二回の裏。なのはママチームの攻撃開始。

「はつきりと断言させてもらうツス」

「構わんぞヴァイス」

「向こうのチームは 馬 鹿 です!!」

わざわざ二段階拡大+太文字まで使って断言するヴァイスさん。でも、さっきのを見てるとヴィヴィオもちよつと否定出来ません。

「確かに……私もちよつとスバルを焚付けた部分はあつたけど、まさかヴィータちゃんやティアナが、スバルを止めようとしなかったのは意外かも……」

やっぱり、一回の裏終了時のスバルさんへの言葉はなのはママのトランプだったようです。

「確かに——フェイトさんも、スバルさんの意見に乗ってましたし」

「リインさんやルキノさんががんばって止めようとしてましたけど、ダメでしたしね」

ちよつとした仕掛けが、まさかこんな形になるとは、ママもまったくの予想外だったようで。ママだけでなく、エリオさんやキャロさんもちよつと呆れ顔です。

「そして、言わせて下さい」

「どーぞどーぞ」

握り拳を掲げるヴァイスさんを、アルトさんが促します。

「最後にリインさんが見ていた、このテーブルの貝！ ぶっちゃけ、俺も怪しいと思います!!」

力説するヴァイスさんに、他の面々「おおっ」と湧きます。

なかなかの自信みたいですけど、ヴァイスさん。その自信、妄想ですよ？

——もしかして、再び陽動作戦だったりします？

「この貝。もともと、片側の身と柱のある部分だけで蓋が無かったんすよ。でも、今はほら——」

ヴァイスさんが殻を一つずつ手にとって、その場で合わせてみんな

に見せます。

「ヴァイスさん、貝焼いたんですか？」

「おうよ。エリオは見てたよな？」

「はい。確かに焼いてましたね」

「もう一個焼いたんすけどね。そつちはちゃんともう片側も付いたままだったせいで、焼き網の上に乗せ辛いなあって思った記憶があるんすよ」

おお。中々に説得力がありそうなお言葉。

「なんで、みんながOKすれば、これで行きたいと思うんすけど」

なのはママチームのみなさんは、思案顔でヴァイスさんと貝を見比べながら、考えているようです。

一方その頃のモニタールーム。

「なのは……ひどい……」

「なのはさん……信じてたのに……」

「……………」

「もう、ツツコまへんからなー」

と、どことなく投げやりに、はやてさん。

「ちゅーか、地味にヴィータもショック受けとるし」

「リインさん、ルキノさん。ほんとーにすみません」

「いえいえ気にしないでいいってー」

「そうですよー。こちら側に付いてくれただけで万々歳ってやつです」

フェイトママ達三人にジト目をするリインさんですが、当の三人は茫然自失中でまったく気付いてないようです。

そんな忘我^{ぼうが}を彷徨^{さまよ}う人達をさておいて、リインさん達は真面目にモニターへと向かいます。

「ヴァイス……好き勝手言いやがってますー！」

「いや……あの……ほんつとすみません」

「あ、あはははは……」

実際に、二回の表の結果を考えると、ルキノさんみたいに苦笑する

しかないですよー。

それはそうと、ヴァイスさんの力説に、

「むむ……やっぱリインが睨んだ場所が怪しかったようですが……」

リインさんが反応します。

「でも、これもお芝居かもしれませんよね？」

「それ言い出したらキリがない気がしない、ティアナ？」

「まあそれはそうですね……」

ルキノさんの言葉に、困ったようにうなづくティアナさん。

確かに疑いだしたらキリがないですよー。

では、パーティールームに戻ります。

「確かに怪しいけど、とりあえず他も見ない？」

「そうですね。まだ時間に余裕があるのでに貝で決定しちゃったら向こうのチームと同じですもんね」

狙っているのか天然なのか、フェイトママチームにグサリと行くような言葉のナイフを履きながらキャロさんはうなずきます。

それにヴァイスさんも含めて、異論はないようですので、みんなしてまた怪しい場所を探し始めました。

「ふむ」

「どうしたんですかシグナムさん？」

みんなが見ている方向とは逆側の壁を見ていたシグナムさんに、エリオさんが訊ねると、

「いや、あの壁に貼ってあるメニュー。意外と一枚関係ないものが混じってるのではないかと思ってな」

視線でその壁を示しながら、答えます。

確かに、シグナムさんが見ている壁面には、手書きで書かれたお札のようなメニューが一枚ずつペタペタと貼ってあります。

ミッドチルダではあまり見ないですけど、日本とかだと結構あるかもですよーこういうの。

元々、このお店自体が日本風の居酒屋さんだからこそその風景なのかもしれません。

それと、このお店のセレクトは絶対にはやてさんの趣味だよね。うん。

「確かに、そう言われると変なメニューが増えていても不思議じゃなさそうな感じですね」

じーつと、エリオさんが壁のメニューを見てみると、ふと何かに気が付いたようです。

「シグナムさん」

「なんだ？」

「あの【鳥飼】ってメニューなんですけど」

「ああ」

「鳥飼ってトリ貝のコトですよ？ 漢字ってあれで合ってるんですか？」

確かにエリオさんの指摘の通り、漢字として見るとおかしいかもしれませんねー、これ。

ふりがなとしてミッド語で【T o r i g a i】と書かれていますから、漢字を知らない人を見ると間違ってるかどうかは分からないのは確かです。

「なるほど。漢字を見たことがないミッド出身者からすれば超難問と言えるかもしれんが——」

エリオさんの差したメニューにうなずいてから、シグナムさんはなのはママを呼びます。

「なのは——聞きたいのだが、あれは、あれで漢字は合っているのか？」

「んー……どーだろー……」

そしてエリオさんが見つけた【鳥飼】に、なのはママも首を傾げます。

「当て字だとしても、貝だったら普通に【鳥貝】ってなると思うんだけど……」

あれ？ もしかしてリアルミス？ お店の人が間違ってるだけで、

最初からあったものではありませんから、正解ではないんですけど。

「貝つていえば、ヴァイス君の貝も怪しいんだよねー」

視線をテーブルに戻しながら、なのはママは自分の顎に手を当てて、そう呟くのでした。

モニタールーム。

「やっぱですねー、リインの睨んだあの貝は怪しいですよ」

「まあ理屈では、リインさんとヴァイスさんの意見は合致してますけど……」

「問題はその記憶が正しいかどうかなんですよね……」

ぼーっとしてる人達にほとんど戦力外通告をだしたリインさん、ティアナさん、ルキノさん達はモニターでなのはママチームの様子を見ながら、テーブルの上の二枚貝について議論中。

その様子を見ているはやてさんの笑顔といたら……ッ！

「つまりアレですよ。リインさんやヴァイスさんとしては、元々片側だけがお皿に乗ってきていて、正しく閉じるようにもう片側が追加されたってコトですか？」

「はいです」

むむう……と、ティアナさんとルキノさんは眉を寄るのでした。

パーティールーム。

リインさん達が眉を寄せている間にも、なのはママ達も意見を出し合っていたようですが、考えた結果、なのはママチームはターゲットを二つに絞ったようです。

ヴァイスさんが見つけた、二枚貝。

エリオさんが見つけた、【鳥飼】。

「最終的にはなのはさんが選んでいいツスよ」

「私の判断でいいの？」

「ああ、お前がリーダーだしな」

そんなワケで、他の人達も異論がないようなので、なのはママへ判断が委ねられました。

「それじゃあ……はやてちゃん。お願いしまーす」
「了解やー」

モニタールーム

「もう呼ぶですかッ!？」

「えらく巻きじゃないですか向こう!？」

「せやなー……まだ十分経ってないんよ」

「もしかして、それだけ自信有りってコトなんでしょうか?」

「なにはともあれ、パーティールームへ移動して答えを聞かないと始まりません。」

ようやく立ち直り出した三人を連れ、リインさん達は祈るように、はやてさんの後に続いてパーティールームに向かうのです。

運命(?)のパーティールーム。

アルトさんに呼ばれ、モニタールームからははやてさんがやってきます。

多少持ち直したもののまだ完全復活していない三人と、何処か祈るような三人と共に。

「それじゃあ、リーダーのなのはちゃん。答えをどうぞー」

どき… どき…

ざわ… ざわ…

そんな心音が聞えてきそうなほどの緊迫感を感じるリインさん達を知ってか知らずか、なのはママは軽く息を吸い、少し溜めてから――

「答えは……」

ソレに向かって真っ直ぐに指を向けました。

「あの、【鳥飼】ですッ!!」

ルキノさんがその解答に思わず安堵したようですが、予断は許さないといった様子で、リインさんとティアナさんが、はやてさんの判定を待っています。

「とりがい?」

「うん」

「まあ……字もなんや違ってる気もするなー」

「はい。何か当て字過ぎる気がするなーって、僕となのはさんとキャロで」

「なるほどなるほど」

うんうん、とはやてさんはうなずき、

【鳥飼という当て字の張り紙が増えている】は……」

楽しそうにその正否を――

「……………」

溜めに溜めてから、告げました。

「ばあああつー！ 残念ツ!!」

「ええええええ……………」

みんなして落胆するなのはママチームですが、まあ当たり前です。間違いなんてないんですから！

「でもはやてちゃん。あんな当て字あるの?」

「ああ。あれな、お酒なんよ。ここの店主さんも地球出身で、わざわざ独自ルートで仕入れてるらしんよー」

うああああ——…………と、明らかに落胆する、地球滞在経験者の方々。

「さすがに、酒となるとエリキヤロには厳しいッスねー」

「主ならともかく、私もあまりな……………なのははどうだった?」

「好きだけど、良いお酒や美味しいお酒って、だいたいお父さんやら恐さんやらが用意してくれるから、銘柄ってあまり詳しくは……………」

「詳しくかったら、これは除外できますもんね……………」

件のお酒ってこれですね。

米焼酎・吟香 ぎんか 鳥飼 とりかい

地球の検索サイトでググればちやーんと出てきます。

読みは【とりがい】ではなく【とりかい】が正しいみたいですねー。フルーティな味わいで焼酎が苦手な人も飲みやすいとか何とか。

でもヴィヴィオはお酒飲めないので良く分からないから、解説は割愛させていただきます。

がつくりとするなのはママチームとは裏腹に、何だかテンション高

めになってきたのが、フェイトママチームの正気組三人です。

これは勝てるそばかりにガッツポーズ。

「まあホラなのはちゃんチーム。これ、超難解間違い探しやから。そう簡単にはいかへんって」

難解っていうか、正直反則じゃないかとヴィヴィオは思ってますけどねー。

どよくん……っとなつたなのはママチームのみんなに声を掛けたのはキャロさん。

「でもほら！ まだあと一回解答できますから！」

「キャロの言う通りだよねー。次、がんばりましょー！」

「ふっふっふー……キャロもアルトも甘いです！」

「そうそう。次があるか分からないのに、ねえ」

なにやら自信満々な感じのラインさんとティアナさん。

でも、本当にそんな自信もっちゃっていいんですか？

本編・破【D】

パーティールーム。

さあさあ攻守を交代致しまして、ついにやってきました最終回！
接戦なんだかそうでもないのかイマイチわからないですが、フェイトママチームによる最後の攻撃となったわけです。

フェイトママ達も何とか復活したようで、さあどうなるのでしょうか——…ッ!?

「ちゅうわけで、フェイトちゃんチーム最後攻撃……開始や！」

はやてちゃんの合図の元、何やらリインさんとティアナさんが、他のメンバーを先ほどの貝の所へと集めています。

本当に、ハマグリを選ぶつもりなんでしょう。意識が彼方に飛んでいたフェイトママ達に説明をしてるようです。

そして——

「そんなワケでして、リイン的にはこのハマグリで行きたいと思うですが……」

リインさんが示す貝をティアナさんが手にとって、みんなに見せま

す。

「あたしは構わねー」

「うん。私もいいと思うよ」

「右に同じくです」

ヴィータちゃん、フェイトママ、スバルさんがさううなずいてから、一拍おいてぴったりと声を唱和させました。

「二——つていうか、文句言う権利ないし」

あ、あははは……確かに、二回の表のコトを考えるとさうかもしれ

ません。
そして、ティアナさんもルキノさんもリインさんに異論がないよう

です。

——と、言うことは……
「では、決定ですっ！ はやてちゃんっ！」

モニタールーム。

「おおおおっ!?!」

「ええええっ!?!」

「えらく巻いとるなー……フェイトちゃんチームは……」

三分経ってませんもんねー。早いってレベルじゃねーぞってやつです。

さすがに、はやてさんも、なのはママチームのみんなも驚きを隠せないように。

ヴィヴィオだって、まさか即決するなんて思ってませんでした。

それでも、呼ばれたからには行くしかありません。

はやてさんは席から立つと、なのはママチームを引き連れて、パーティールームへと向かうのでした。

「さあさあ、フェイトちゃんチームの解答や。これで正解やったらなかなかドラマチックやよー」

「ふふふのふー! リイン達が劇的に終わらせて、なのはさん達に奢ってもらいますよ!」

リインさん筆頭に、なにやら自信満々のようですけど、それ——記憶に騙されてるんですよ?。

「フェイトちゃんチーム。最終回・表、まさかの五分経たずに答えを出したわけやけども……」。

さあフェイトちゃん——その解答……どうぞ!」

はやてさんに促され、フェイトママが一つうなずくと、

「答えは——」

リインさん達を信じるように、力強く、そのターゲットを指さしますッ!

「ハマグリの方が増えているッ!!」

「ほう! ……で、リイン。それどういうコトや?」

はやてさんに訊かれて、リインさんが嬉々としながら説明を始めます。

元々フタがなかったこと。それで焼いていた記憶があるのに、戻っ

もはや補足というか、完全なダメ押しとなったその発言に――

「ぶーぶーぶー！ リイン納得いかないです！」

「信じらんねー」

見事毘にはまってリインさんと一緒にヴィータさんがぶー垂れませんが、そもそもヴィータさんは信じてたから毘にハマったんじゃないですか？

「ようするに、や。なのはちゃんは何となく、メッセージっぽいモノを出しておけば、フェイトちゃんかスバル辺りが勝手に深読みし始める。」

そんで多分、冷静に対処するだろうリインやルキノ辺りの意見を肯定する空気を出しておけば、ガツカリメンバーが正気に戻った後、それを否定する可能性が減る……と。そんな感じやろ？

「ドンピシャな推理だよ、はやてちゃん」

「せやろ」

「うう……何それ……なのは、ヒドイ……」

「にやはは——勝負の世界は非常なのだよフェイトちゃん♪」

何という策士なのはママ。

シグナムさん辺りに対して巧妙にお芝居具合を隠して、敵を欺くにはまず味方からを地で行くとは！

「ひどいですよなのはさん！」

「いやスバルありがとうね。色々信じてくれて」

「だからヴァイスさんはろくな大人になってないんですね！」

「何とでも言えって。勝てばよかろうなのだーってな。あつはっはっは」

スバルさんとルキノさんが思わず喚きますが、もう後の祭り。ご愁傷様です、としか。

涙目だったり怒ったりと忙しいフェイトママチームを笑いながら、はやてさんの宣言で、攻守が交代するようです。

「さあさあ、最終回の裏を始めようやないか。」

これで劇的なサヨナラ勝ちを迎えるかどうか……攻守交代や！」

三回の裏。

「向うはすぐに時間使いきってくれましたからね」

「うん。こっちは、時間ギリギリまで使おう！」

えいえいおーつと気合いを入れて、なのはママチーム最後の攻撃開始です。

「みんないいか？ 先ほどの正否発表の時に少々気になったものがあつてな」

どこか自信ありげに、シグナムさんが言います。何やら見つけたみたいですが、はてさて。

「あのとき、ふと見えたのがあれだ」

シグナムさんが指で示す先。そこにあるのは、天井に付いている大きな看板でした。

「あの看板に地球名物と書いてあるだろう？」

確かに【お寿司（O—S U—S H I）】と書いてあるその看板の右上の方に、緑色の養生テープで【地球名物】という張り紙がやつついで付いています。

その姿もさることながら、地球名物ってなんだよと思わずツツコミたくなってしまうシロモノです。

「あの緑色のテープ確かに、わりと色んな仕事で使うよね」

確かに無意味な紙が、テープで貼られている姿は怪しいですが——
「でもシグナムさん、ここの汚れが看板と繋がってますよ？」

イスを持つてきてそれに乗って紙を観察していたアルトさんが、汚れを示します。

「む？ そうか。なら違うな」

あれ？ 結構あつさりど。

「あの、姐さん。どことなく自信がありそうだったんすけど……これっすか？」

「ああ」

うなづくシグナムさんに、思わず他のメンバーが嘆息します。

「実は私も見つけてはいたんだけど、たぶん違うかなーって」

「そうなのか。なのは？ ならば言ってくれば良いものを」

「あの……私、実はそれ。最初に見た記憶がちよつとあるんですが……」

「そういうのは言ってくれキャラ。一人胸の裡で盛り上がっていた自分が少し恥ずかしいではないか」

「す、すみません……」

バツの悪そうなシグナムさんに思わずキャラさんが謝りますが、別にどっちが悪いつて言うのもないので、謝ったりする必要はないと思いまーす。

それはさておき――

「まあそうなると私はもう戦力外だ。みんな私の分までがんばってくれ」

「シグナムさんにしては珍しく弱気ですね」

「そう言うがなエリオ。確かに私は勝負事は好きだが、この手の頭脳戦はさっぱりなんだ」

「それはまあ、何となく分かりますけど」

そんな感じで、なのはママチームは、改めて怪しいところを探し始めますが――

「残り三分やよー」

「もうそんな時間ツ!」

探して回るものの、中々結論が出ず、しかも時間ギリギリのせいで変なプレッシャーがあるのか、出る案出る案がどうにも変な内容ばかり。

「超難解つてくらいだから、この水槽の砂が一粒増えてるとか?」

「そこまでいくと、もう難解ってレベルじゃねえだろ」

「ここに飾つてあるスイカ、大きい方だけキンキンに冷えてませんか?」

「あ、ほんとだー。何でだろ?」

「こっちの貝殻を飾つてあるザルの中に、綺麗な石が一つだけ落ちてるんですけど……」

「確かにこれは怪しいが……あからさま過ぎないか?」

とまあ、そんな感じでみんなの意見がまったく合わず、そして結論が出ないまま……

「タイムアップで無回答扱いになると、腹括って解答するのどっちがええ?」

そんな感じのはやてさんの声が聞えてきて、なのはママチームは観念したようです。

「なのは。もうお前に任せた。色々出てきたが、お前がどれを選んで私も文句は言わん」

「え? ちょっとシグナムさん!?!」

「姐さんに賛成」

「先輩に賛成」

「アルトさんに同じくです」

「エリオ君に同じくです」

「み、みんなしてッ!」

極限の状況に追い詰められた中で、答えを見いだせず他人を尊重するように見せて、決定も選択も全て託すという言葉に置き換え放棄する行為——人、それを丸投げと言う……なんちゃって。

「はい、なのはちゃん! 私が到着するまでの僅かな待ち時間にネタを探すんはあかんて」

「うう……だつてえ……」

「ちゆうか、罫を仕掛けるのに夢中になりすぎて、みんなの意見を纏め忘れとるとか、本末転倒もええところやろ」

まったくもって、その通り。

そんなワケでなのはママも観念したのか、うーうー悩みながらも、よしと決めたようです。

「それじゃあなのはちゃん。正解をどうぞ」

「正解は……」

なのはママは、最後の方に見つけた飾り付けてある貝の上に乗っている蒼い宝石（偽）を指さしました。

「あの、なんかジュエルシードっぽい!」

「貝飾りの上に乗っている【なんかジュエルシードっぽいのは——】」

今回はあまり溜めずに、はやてさんは手をクロスさせちゃいます。
「ばっ！」

当然ですよー。答えが無いわけですし。

……でもあれ？ これって決着ついてないけどどうするの？

本編・急

——さて、そんなワケで延長五分のサドンデスが始まります。
両チームが怪しいと思ったところを五分間ひたすら選び続けるというこのサドンデス。

当然のことながら、誰も正解を出せませんでした。

まあ、間違いなんてないのに間違いを探そうとしてるから当然なんですけどねえ……。

サドンデスでも決着がつかず、げんなりとした様子で席についてみんなを見渡しながら、はやてさんが切り出します。

「えー……この企画に決着を付けるために、ひとつ究極のゲームを用意しました」

やはりこの企画、そう簡単には終わらないようです。

「究極なんだ……」

「ちなみに、至高のゲームというのも考えよう思いましたが、何も思いつかへんでした」

どうでも良い補足情報を交えつつ、

「そしてこのゲーム……個人戦になりますんで、敗者は一人へと変更ですー」

『ええええええええええッ!!』

はやてさんの恐ろしい発言に、全員が一斉に悲鳴を上げます。

敗者は一人——つまり、さっきまでチームで勝っていたら、チームで割り勘になったはずのお勘定が、一人が全額自腹という、もつと恐ろしい企画に変更となったわけです。

ちなみに、ゴチでやれというツツコミは却下ですが、はやてちゃんは今度ゴチをやるか……などと画策しているようです。

まったく、色んな意味でダメな大人に権力を持たしちやいけないよ

い例な気がします。

「なんで正解出来なかったんだよそつち！」

「うあ。ヴィータちゃんそれがそれを言う!？」

そんな感じで、みなさんが良い感じでテンション高くなってきたところで、

「では——例のアレ、よろしゅう頼みますう」

パンパンとはやてさんが手を叩くと、お店の人が大きなお皿にシュークリームをたくさん載せて盛ってきました。

もしや……これは……ッ!？」

「罰ゲームの定番、からしシュークリームや！」

十三個のシュークリーム。

十二個は美味しくて、一つは激辛。ほんと、定番中の定番ですねー。勘だけを頼りに一つ選んでパク。激辛だったらごめんさい。分かりやすいルールです。

「こ、こんなコトで……」

「単純ながら、からしダメージ+自腹つて地味にひどいような……」

「うう……」

どうやらみなさんにも大好評のようで。

「まあ、私だけ食べない言うんもフェアやないっちゅうコトで……
ヴァイス君」

「ういッス」

「一個好きなの選んでええよ。それを私が食べるから」

「マジっすか!？」

確かに数えてみると、シュークリームの数は十三個あります。

はやてさんも結構律儀ですねー。司会者だからって理由で、やらな
いっていうのも手なのに。

「もちろん、それが激辛やったら、私の負けや言うコトでOKや」

「よっし。その言葉忘れないてくださいいよー」

意気込むヴァイスさん。じーっくりとシュークリームを選び……。

——と、ここでドクター八神からコメントです。

えー……実はこのシュークリーム。最終実験の材料だったりします。

人は思い込みだけでどこまで自分を追い詰めるか……

その辺りを楽しんで頂きたいと思えますんで、もうちようお付き合
いのほどよろしゅうお願いしますー。

では、ヴィヴィオ。ラストパートよろしゅうなー。

おまかせあれ！

そんなワケで、ヴァイスさんが選んだ一つを——

「それじゃあ、いただきまーす」

はやてさんはためらいなく口の中へと放り込みました。

「うん。美味しいよー」

固唾を飲んで見守るみんなに、そう言って笑顔の一つ。

何を仕掛けているのか知りませんが、絶対に自分からはらし入りを食
べないって確証があつたんでしょねー……。

「ちゅうわけで、みんな好き勝手順番決めてよいよー？」

全員が顔を見合わせますが、すぐには誰も手を挙げません。

ですが——

「じゃあ、スバル・ナカジマ。一番やりますー！」

覚悟を決めたように、スバルさんが名乗りでました。

「おおおっー！」

どよっとみんなざわめく中、スバルさんは立ち上がり、じーつとお
皿を眺めます。

「自分のタイミングで食べてええからなー」

はやてさんにうなずいて、しばらく色々なシュークリームを見てか
ら……

「これだー！」

一つ選び、スバルさんは手に取ります。でも手に取るだけで、なかなか口に運ばず、じーつと手の中のシュークリームを見ている瞳が、なんだか仕事中の時のように真剣です。

「なんか……すっごいドキドキしてきた」

見てるヴィヴィオもハラハラものですよ。

「よしー！ 行きます」

自分を激励するようにそう叫んでから、パクつと行きました！

「クリイイイイイイイイイムツ!!」

おめでとーございまーす！

しかしこれ……何か仕掛けがあると分かっているけど、見てることこの心臓にも悪いです。

そして、参加者のみなさんはスバルさんの喜びのように、逆に青ざめています。確率があがるんですもんねー……。

「よし、スバルがいったなら私もー！」

次に名乗りを上げたのは、なのはママ！

じーつとお皿を見ていると……

「これ——よく見ると、わざわざ全部のシュークリームに、からしを入れました的な穴が開いてるんだけど……」

いやはや。徹底してますね。はやてさんは。

「ええいー！ 悩んでも仕方ないからコレー！」

そして意を決したなのはママは、手早く一つ選んでためらわずに口の中へ。

「良しー！ 甘いー！」

ガッツポーズのなのはママと、それに拍手を送るはやてさんとスバルさん。他の人はもちろん青ざめ度がアップです。

「ところでこのシュークリーム、なんかとっても食べ慣れた味なんだけど……」

「シュークリームの提供は翠屋でお送りしております」

「わざわざッ!?!」

でも、桃子さんとかこういうノリ結構好きそうですね。
はやてさん同様に桃子さんも関西出身ですし。

ちなみに、おばあちゃんと呼ぶには、見た目があまりにも若すぎる人なので、ヴィヴィオは桃子さんと呼ばせてもらってまーす。

どうでもいい情報ですねごめんなさい。

さてさて、収録時間ももうあまりないので、ちよつと巻いていきま
すよー。

この後も、神妙な顔で口に入れ、歓喜の甘さを味わう人達が続々と。
その興奮ぷりといったら、もはや単なるゲームとはいえないほどで
す。

そうして白熱のシュークリームバトルも終盤。残ったシューク
リームは二つ。

「こんなコトってあるんやねー……」

「映像的にはすごい美味しいっすけども……」

食べていない人は二人。

エリオ・モンディアルさん。

キャロ・ル・ルシエさん。

二人とも、かなり顔色悪いです。そして、それを見守るフェイトマ
マの顔が、もはや完全に泣きが入ってます……。

その横で、フェイトママが暴走しようものならすぐにでも抑えよう
と、なのはママがスタンバイしてたりも……。

それにしても、フェイトママにそんな顔されると、ヴィヴィオも
ちよつと……。

いやいやいや。ナレーターが私情を挟んではいけませんね。すで
に挟みまくってるだろというツツコミは却下して続けますよー。

「よしー」

おもむろに立ち上がったのはエリオさん。

この後にく、キャロさんじゃなくても思わず『惚れてまうやろく』
と言ってしまうようなカツコイイ発言に酔いしれて下さい。

「僕が辛いのを当てればいいんだよねキャロ」

「え？」

「僕ですね、ずっとこれにからしが入ってるんじゃないかって思ってたんですよ」

そう告げて、エリオさんが手にしたのは、なんと自分でからし疑惑を持っていると示した方のシュークリーム！

「行きますー！」

味が分かったあとの発言にも、みなさん注目ですよー。
ぱくッ！

「……………キャロ、ごめんッ！」

血を吐くように、エリオさんは謝罪を口にしたのです！

『えええええええっ!!』

驚いたのはキャロさん以上に周囲の人達。まさかここまでドラマ的な展開になるとは誰も思っていなかったことでしょう。

……………同時に、私はその……………色々このドラマを台無しにしてしまう推理が脳裏に浮かびました。

「さてと、キャロ。中途半端は無し言う約束やったからな。ちゃんと食べてなー」

「うづうづ」

涙目になりながらも、キャロさんはそれを受け取ります。

「うー……………えっ……………と、あのね、エリオ君。気に掛けてくれてありがとう。キャロ・ル・ルシエ、行きまーすッ！」

健気な表情でそうエリオ君に微笑み掛けてから、キャロさんはあまり大きくないそのお口を大きく開けて、ぱくりと半分だけ噛み付きま

す。
同時に、はやてさんはにやりと笑いました。

——ああ、やつぱり。

「もぐもぐ……………あれ？」

キョトンとした顔をするキャロさんを横目にはやてちゃんは立ち上がると、ポケットからお財布を取り出します。

その行動の意味が分からないまま、みんなはキャロさんに改めて視

線を向けると、彼女は改めてさらに半分だけ食べます。

「……あれ？ あの……これ、甘いです。たぶん……最近流行のカスタードと生クリームのダブルクリームっていうやつかと……」

あまりの混乱によく分からないコトを言い始めるキャロさんですが、それは見ているみんなも同じです。

「??？」

そしてみんなが呆然とするなかで、ここではやてさんがネタ晴らし。

「えーっと、今日の企画はですねー。同窓会を兼ねつつ、私個人的に「人間はありもしない答えを求めてどこまでプレッシャーを受けるか」を楽しませてもらいましたー」

はああッ!? なにそれッ!?

だいたいみなさんそんな感じのリアクションでした。

実験は大成功って感じですかねー。

「それじゃゲームを終わったところで、奢る言う約束の通り、ちよっとお金払ってくる。みんなまだ食べたかったら食べててええけど、これ以後の追加注文は自腹で頼むよー」

そんなコトを楽しそうに告げるはやてさん。

「え? あの……はやて?」

「ちよっとはやてちゃん!」

みんなが呆然とするの中で、スキップでもしそうなくらい軽やかな足取りでパーティールームの入口を目指します。

「ああ、お姉さん。おあいそ。このカード一括で頼むなー。それと、このメモの宛名で領収書もお願いや」

「かしこまりました」

そうして、部屋の外にでてすぐ近くにいた店員さんにはやてさんは自分のクレジットカードを渡してから、向き直ります。

「それじゃあ、私はこの後、仕事があるんで先に失礼するなー」

「ちよ……ちよっど、はやてさん!」

「なんや?」

「えつとあれ……あのあの……えつつと……あれですあれ!」

「落ち着けスバル。主……先ほどの間違い探しの答えは？」
にやにやにやにや。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「その顔って！」

「ええと……その……まさか!!」

「ぷ……くくく……あははは……っ！」

「はやてちゃん!?!」

「うあ、もしかして、もしかする？」

「さつき、何か増えてるとか言ったのって……」

「おう。何も増えてへんよ?」

『うあああああああッ!?!』

ほんと、みなさんご苦労様でした。

「ちなみに、なのはちゃんチームの想像通り、この宴会最初から録画しててな。今度、チャンネル1に、今回の出来たて映像データを編集しに行くんよ」

「うわぁ……」

「たぶん、みんなが探し物してる時、画面の下の方に『答えなんて無いのにそれらしいコト言って興奮してる』とかなんとか出てると思うよー」

「もう笑うしかないツスね……」

「あたしは、とりあえず食えるからどうでもいい……」

からしの方は、改めて見てもらうと、みんなありもしないからしに

必死だよーって、笑えてくるかもしれないよ。

「ううっ……本気でエリオとキャロが可哀想だった私はなんだったの……っ？」

「何だったんやろうなー」

「うわああああああ………っ！」

恥ずかしいのと悔しいのと悲しいのと、何だか色々な感情まぜこぜになったフェイトママが顔を真っ赤にして、てうづくまります。うん気持ちはとつてもわかりますよフェイトママ。

「それじゃあ、みんな今日は楽しかったよー。また機会があればよろしゅうなあ！」

そう言つて颯爽と去つていくはやてさん。

しばらく呆然としていたみなさんでしたが、ほとんど同時に正気に戻り、声を唱和させました。

「楽しかったのは……」

「アンタだけだああああ!!」

お後がよろしいようで。

本日のナレーションは高町ヴィヴィオでしたー。

みなさん、お疲れ様でしたー。そして番組に最後までお付き合い頂き、ありがとうございます。

それでは今宵はここまでです。では。

【YAGAMI HAYATE no Bangumi | clo
sed.】

おまけ・後日談・休日の午後二時――

クラナガン放送――Oh! デブニング

――というわけで、本日の道路交通情報でした。
リスナーの昼下がりを灰色に彩る約二時間。

シノ・ケカオンのOh! デブニングここから後半戦。

今日は前半に引き続き、管理局の小娘さんの一人に付き合ってもらいますよ、と。

「こら（笑）。ちゃんと紹介してくださいよ」

――じゃあ、自分でどうぞ。

「えーっと、改めまして高町なのはです。後半戦もよろしくお願いまーす」

――ちなみに、僕が彼女を小娘よばわりしてるのは、えーっと、何だっけな。

彼女がまだ、管理局の期待の星だったのか、管理局のアイドルだったのか……

あるいは、赤い帽子を被ったヒゲの土管工だったのか、イマイチ世間からの扱いがよく分からなかった頃にあった、雑誌の企画でね、対談企画があつて、その時が初対面だったんだけど。

（あはははは）

「そうそう。あの時、ブロック壊したり、カメを踏んづけたりしながら、うっかり私が、シノさんの方が年上なんだし、私なんて小娘扱いで構いませんよ――なんて言っちゃたら、それからずーっと小娘呼びなのこの人」

（くくく……ははは）

――僕は君が何歳になろうと、小娘と呼ぶコトを、今ここに誓います、と。

「誓わないでください」

――無視。さて、ダイレクトメッセージボックス、開けっ放しになっっていますので、ちよいと一枚。

「はいはいどうぞ」

——ラジオネーム、『梅干しはすっぱい』。なんか、すごい好きだこの名前。

「普通なのが良い味だしてますよね」

——なんか面白くなっちゃう。普通なのに。梅干しはすっぱい。

梅干しはすっぱい……（笑）

（あははははは）

「分かりましたから、はやく読んでくださいよ（笑）」

——もうちよつと梅干しすっぱいしたいんだけど仕方ない。すっぱいしたいって何だよ！

（あはは）

「いいから読む！」

——はい。

前半から楽しませてもらっています。

でい〜ぶいでい〜含めて、なんだか管理局員の方々のイメージがちよつとだけ変わった気がします。

「ありがとうございます。でも、だいたいの方は多分、イメージ通りですんで、私みたいのはきつと例外かなあ」

——まあそうだろうな。

どんなネタが飛び出してくるのか、後半戦も楽しみです。

ラジオで喋るということは初めてでしょうから、大変だとは思いますが、なのはさん、頑張ってください。

「幼馴染みのお姉さんに、出身世界で知らない人は居ないってくらいの歌姫さんがいます。

その関係でちよろつと現場に行ったり、その場のノリでブースに放り込まれたりしたので、実はラジオ出演って初めてじゃなかったりします」

——それにしたって、トーク慣れ過ぎてる気がしますが、話題はとりあえずでい〜ぶいでい〜だな。

「あれはねー……ひどかったの。前半でも話したけど」

——いやー、俺はすげー好きだよああいうの。

「知ってます」

——最高だったね。似たような計画を若手芸人にしてやろうと思ってたのにやられた! って感じ。

「やられたくなのはこっちですよ。そもそも撮影だって話すら聞かされてなかったんですから」

——じゃ、ほんとただの飲み会だと思ってたんだ？

「そーなんですよー」

——ひっでー(笑)

(あはははははははははは)

——まじ尊敬する(爆笑)

(わはははははははははは)

「ひどいのはどっち!?!」

——あははははは! いやいやいや、最高ですよ実際。

「くやしいので、仕返しを用意してます」

——らしいね。この番組中にやるんでしょ？

「そうそう。シノさんとか、基本ブースの中で笑ってるだけの構成のヤタノベさんには事前に言っておいたんですけれども」

(うんうん)

——今、丁度裏でやってるおっしやれえええな、ラジオ番組に八神はやて特別捜査官が、だいたいこの小娘と似たような理由で生放送にゲストで出てるらしいのよ。

「そうそう。それでですねえ、ここに私の出身世界でメジャーな通信端末が『ケータイ』ってのがありまして。

もちろん、はやてちゃんも持ってます。まあプライベートな端末ですから、ブースの中では電源を切ってるとは思いますが……」

——何よ？ 勝手に電源が入る細工でもしてきた？

「ん」

——放送事故だけは気を付けてよ？

「さすがに、気を付けますよー」

面白い事故起きちゃってリスナー取られるの嫌だから。

「そっち!」

(あははははは)

——それ以外何があるんだよ！ リスナー、超大事！ 番組台無しな事故は大歓迎！ なお当番組は絶対責任とりません！

(ははははは)

「ですよー。ま、しませんよ。で、話の続きですけど」

——はいはい。

「事前にはやてちゃんのケータイにはウイルスっぽいプログラムを仕込んであります。

そろそろ電源が入って、さも今まさにメールが届いたかの如く、着信音がなります」

——番組中、端末の呼び出しコールとか普通にダメな事故だよ！

「気にしちゃ行けません。私は気にしません」

——おい！（笑）

(あははははは)

「ほいでー、定期的に着信コールになります！ メール本文には数字のみ！」

——数字？

「そうそう。最初は5。次は4」

——カウントダウン？

「いえす！ いぐざくとりー！」

——なに？ ゼロになると何が起きるの？

「それはいえませんよー。生ですから。

こっちのリスナーがはやてちゃんにチクらないとも限りません。向うもダイレクトメッセージボックス使ってますし！」

——お？ どうやら届いて焦ってるみたいだなー。

ブースの外にいる連中がこちらの番組を、お尻を出しながら聞いてますんでねー、そのお尻でサイン出してくれています。

(ぶははははは！)

「にやはは、分かり辛いから、普通に紙とかに描いて下さいよー」

——ま、何かあったら全部、ブースの中で笑ってる構成のヤタノベのせいですから。

「そうそう。シノさんも私も基本的に台本通りにしかしゃべってないですから」

——小娘のこのイタズラも台本通りだから。

えーっと、FMCMC局さんで、何か文句がありましたら、うちの局じゃ無くってヤタノベ個人に直接言っして下さい。

「私とシノさんは何も悪いコトはしていません」

——全部ヤタノベの掌の上。セリフも仕草も雰囲気も、ゼーンぶ台本通りだからかな？

(わははははははは)

「そんなワケなんで、FMCMCの方。なのはの小さいたずら、許してね☆」

——小さくねえから！

(くはははははははは)

FMCMC局——ウーマンズ・ウーマン

——今週も始まりました、働く女性の休日に、素敵なしとときをお送りするウーマンズ・ウーマン。

お相手は私、ユン・ハーキライト。そして、本日、私と一緒に相手手して下さいるゲストは、この方。

時空管理局のトライエースと呼ばれる三人の女性魔導師の一人。

あのJS事件を解決へと導いた立役者の一人でもあります、元機動六課部長、現在は特別捜査官をしております、八神はやてさんです。

「どうもー。八神はやてですー」。

えらいカッコいいご紹介かりましたけど、そんな大層なもんでもなく、ただの小娘ですんでー」

——いえいえ、ご謙遜なさらずに。最近では、はやてさんが監修なされた映像ソフトを出されていますね。

「でい〜ぶいでい〜ですね。あれは監修というか、半分悪ふざけやっただんですけど、妙に番組スタッフから評判よくてですねー」。

なんや気が付くと特別版とまで出してくれるようで。ほんま、あり

「がたいコトです」

——私も見せて頂きましたが、ヒドイ内容でしたねえ……あ、褒めてますよ? (笑)

「あははは。人によつてはほんとダメや言う人がおるコアなネタになつてしまつてるようでして……」

せやけど、あれも癒し——つちゆうんとちよう違うか——えーつと……軽い息抜きみたいな、みんな普段は気を張つてお仕事してますから、ああいう、本当の意味での危険が隣にない緊張感つて貴重なんですよー」

——そうですね。執務官さんや、防災士長さん達ですもんね。

みなさん時間もなかなか合わないでしょうし、そう言われますと、あの収録中はとても貴重なんですね。

「そうですー」

——それと……で、お便りを一つ。私も同じコトを思つたんですが……ネージュさんからです。ありがとうございます。

ユンさん、そしてゲストの八神はやてさん。こんにちわ。

——こんにちわ。

「こんにちわー」

八神はやてのでいくぶでいく、楽しくは意見させて頂きました。

「いやーありがたいことです」

見ていて思ったのですが、前半の和気藹々とした食事も、後半のいたずらの時も、何だかみなさんの反応がとても普通の人で、管理局の魔導師というイメージがなんとなく良い意味で崩れた気がしました。

これからも、お仕事がんばってください。それと、また機会がありましたら、このでいくぶいでいくのような企画も遣つて頂けたらと思います。では。

——と、いうワケですね……わたしも、申し訳ないんですけど、管理局の魔導師さんてちよつと、怖いって思つてたんですけど、本当にみなさん、食事の時とか普通の方々という感じでして、休日の姿は私達と変わらないんだなあと。

「まあ、魔法ぶっ放してドカンドカンやってますからねー。そういうイメーজを持たれてもしいやーないと思いますよ。」

それでも、魔法が使えるってだけの普通の人なんですよー……って
いうのを見せるんがでいゝぶいでいゝの当初の目的でしたから、そう
いう風に思っただけなら幸いです。ありがとうございます」

——なるほど、だとしたら本当に成功だったんですね、でいゝぶい
でいゝは。そうそう実は聞きたいことが……

♪ぱんっ♪♪おっぱい♪

——え？

「わわわわわ！ すいません、プライベート端末の電源切つとくん忘
れとつたみたいです」

——いえいえ。こういう小さなミスはむしろ生放送の醍醐味です
ので。

「あ、あはははは……」

——その、変なコト訊いてごめんなさいね。何だか珍しい端末です
けど……

「ああ。これですねー……出身世界で流通しとりますケータイという端
末です。現地の友達なんかとやりとりするのに使ってるんです」

——なるほど。差し支えなければ、今のメール？ ですか？ 内容

訊いてもよろしいですか？

「大した内容じゃあらへんと思えますけど……えーつと……あれ？
なのはちゃんから？」

——なのはさんと言いますと、教導隊の高町なのは一等空尉ですか
？

「そうです。でも、おかしいですね。彼女、ちょうど裏番組に生出演し
てるはずなんですけど……内容は——件名「でいゝぶいでいゝの仕返
し今ココで」……え？」

——おや？

「本文「じゅゝすいゝなのはだよー☆ はやてちゃんのケータイを
ちよつと弄って、勝手に電源が入るようにしてみたんだ。にやはは
は」……なんや、テンション高いな！」

「電源切つても時間になると勝手に電源が入るから切つても無駄だからねー。でい〜ぶいでい〜のお返し、覚悟しておくよーに♪ PS ヴィヴィオを変なコトに使った仕返しの方が正しいかも!」

——もしかして、一等空尉はだいぶ怒られているんですか？

「たぶんジョークやと思いますよー。さすがに放送事故につながる、まずいネタはせえへんでしようから」

♪ぱんっ♪♪おっばい♪

「とりあえず、受信メロディの設定は変更しときます (照)」

——はい。そうしてください (笑)

「今度の件名はカウントダウン開始。本文は〔5〕ひと文字……ゼロになつたら何がおきるん?」

——ちよつと楽しみですね。

「あ、あはは……わたしは不安しかあらへんのですけど……」

クラナガン放送——Oh! デブニング

——さてさて、とりあえず、もう一枚くらい、ダイレクトメッセー
ジボックス覗きましょうか、と。

「はいはい」

——えーつと、ラジオネーム……『ちからこそパワー』。

お二人ともこんにちわ。

「こんにちわー♪」

前半戦楽しく聞かせて頂きました。

管理局の魔導師である兄が、なのはさんは管理局一の般若教官なんだと言っておりまして、どんな恐ろしい女性なのだろうと思つていました、

「そのお兄さんの名前、後でこつそり教えてね☆」

——怖っ (笑) えーつと……

シノさんの悪ノリトークに悪ノリをかぶせて話を膨らませるのが
上手で、何ども笑わせてもらってます。

笑いすぎて腹筋が筋肉痛になりそうです。助けて下さい。

「それはねえ、むしろカッコよく割れるまで笑い続ければいいと思うよ。腹筋。そしたら取材とかあるかもだよ。『実録・この腹筋はこう鍛えた!』みたいな。」

——それ放送されたら、ミッド中に笑い声が響き渡りそうだよね。年がら年中さ。

「みんなが笑顔なのはいいコトだとなのはは思いますよ」

——しみじみ言ってるけど、ぶっちゃけ不気味なだけだからなそれ！

ところで、前半でもシノさんが言っていましたけど、お二人は時々プライベートでもお付き合いがあるそうですね。

——どっちかっていうと、なのはと俺の嫁さんの付き合いがあるんだけどね。うん。

シノさんはなのはさんのお宅に行ったことがあるのでしょうか？ あったのでしたらどんなご家庭でしたか？ よろしければ教えてください。

「君はそれを知ってどーしたいの？」

——決まってるでしょ？ こっそり覗きに行くんだよ。言わせんな恥ずかしい。」

「ちよ……っ！ じゃあ話ちやダメです」

——えーつと、今の高町邸はですね……クラナガンの郊外西のですね……

「だーめーですってー!」

——三十キロ行った辺りにあるあの有名な樹海の中にあります。

「え?」

(ふふはは)

——一番自殺者が多い区域にぽつねんと経っているほっ立て小屋。そこにね、自殺しに来たけど自殺しきれない人が暮らしてるんだよ。(急に声のトーン落として) ここでは……チツルという少女が中心になっついて……

「なんかホラー調ッ!」

(はははははは)

メンバーが一人減る毎に、新しい自殺者を説得して、メンバーに加えているのでした。彼女は必ず自分を含めて五人のメンバーを作ります。

なぜかというと、まだ質量兵器の使用が禁止されていなかった旧暦の頃、五機の戦闘機からなる戦闘部隊のメンバーの紅一点……それが彼女だったからです。

ところが、戦闘中に自分を除く四人が戦死してしまったのです。

特殊な素養が必要となる戦闘機故に、チヅルは他のメンバーを探すように司令部から命令されます。

探して探して、結局見つからず、そして見つからずのうちに終戦してしまっただのです。

「その頃が忘れられずに、死してなおも自分の眼鏡に適う新たなメンバーを探してるんですね……ところで、私の家の話は？」

忘れてた！ 何だよ戦闘機部隊って！ 誰だよチヅルって！ ダメだななのは！

「わたしっ!?!」

(あはははは！)

——もつと早くツツコミ入れてよ！ ……で、えーと、そのほつたて小屋の囲炉裏が実はなの家……っていうか、なのは王国の入口の一つなんだよ。

「そうそう。入口のカムフラージュの為の小屋なのにいつの間にか幽霊が住み着いてて困っちゃってるの」

——ちなみにさっきの戦闘機は五機が合体してロボットになるから！ 名前は『エルバトラーV』。今、思いついた！

(くくくくくく)

「無視。ほいでね。その囲炉裏から地下へ降りる階段を降りていくとね、大理石と黄金で作られたのは王国の王宮があるんだ」

——その、地下王国。色々と出入り口があつて便利なんだよ。主に管理局施設や雑誌社・報償局系の近くには出やすいね。

「出やすいですね。そういう風に命令して作らせたから。誰に？」

——知らねーよ！ (笑)

(あははははは)

「あ、わかった！ 土管工！」

——土管工だけじゃ建築はできねえよ！（笑）

(ぶあはははははははははは！)

——くく、まだ時間ある？ はは……じゃあ読もう。ラジオネー

ム、『どす恋喫茶ジユテーム』。

シノさんは自称人見知りだそうです。なのはさんはどうですか？

——だとき。俺が言うのもなんだけど、こいつは絶対人見知り。

「そうだよ。もうね、地下王国の王宮にあるね、『なのはのお部屋』じゃないお部屋」にいつも引きこもってるくらいの人見知り」

——何？ その部屋？

『なのはのお部屋』『ヴィヴィオのお部屋』『フェイトちゃんのお部屋』

『なのはのお部屋じゃないお部屋』の四つがあるの」

——他のやつの『じゃない部屋』はねーんだ？

「うん。ほいでねほいでね。膝を抱えてね、その部屋の片隅でね、いつも不安で震えてって、孤独で孤独で、でも誰にも会いたくないから、孤独の海を泳いでるんですよ。」

でもよくよく考えると、そんな海泳げないっていうか泳ぎたくないから、深海色のペンキぶちまけて蒼に染めてみたりして」

——しかもあれだろ？ 寂しくて仕方ないから、一途にずーつと一つのコト考えて、逆に傷ついてるんだろ？

「そうそう」

——腐葉土恋しい腐葉土恋しいって。そりやもう一途に！

(ぶはははははははははは……！)

「あははははは腐葉土って！（爆笑）」

——大理石も黄金も、私には一時凌ぎでしかないの！ だけど仕方ない！ そういう運命だから！ でもやっぱり腐葉土が恋しくて恋しくてしかたない！

(あはははははははははは！)

「そうそう！ 高級素材のベッドと低反発素材のマットよりも、腐葉土恋しい！」

(くはははは)

——じゃあ、ほったて小屋出口から外に出ろよ！ 樹海の真ん中なんだから一杯あるだろ(笑)

「つていうか、そういう運命つてどんな運命ッ!?(笑)」

(ははははははは！)

——ではでは、ちよいと一息、曲に行つて、CMです。

「あ、カウント3のメールが届いたみたいですね」

——なんか、俺もドキドキしてきた。えーつと、曲。古代ベルカ語なんで読めないです。このグループ名。

(あはははは)

なんかそいつらの、『焦げた大地を越えて』とかなんかそんな曲！

「ええつと、たぶん、アインスフランベかなあ、これ？」

——だそうです。

「ちゃんと紹介しなさいつてまったく！(笑)」

FMMC局——ウーマンズ・ウーマン

——さて、本日のウーマンズ・ウーマン、そろそろエンディングのお時間になりました。

えつと……お顔が真っ青になってますけど大丈夫ですか？

「いやー………迷惑かけてしもうてすみませんですー」

——いえいえ。結局、ゼロにはなつてないみたいですし。

「強がってみたんですけど、やっぱ心臓に悪いんですよー、もう今めっちゃビビってます。」

——こんだけ期待させて何も起きなかつたらどないしよーつて」

——そつちですか(笑)

「嘘です。普通にビビつとります」

♪冷ーコー♪ ♪つゆだく♪

——あ、来ましたね。

「うわ……なんかめっちゃドキドキするんやけどー！」

——申し訳ないと思いながらも個人的にはとても楽しみにしていた瞬間ですので、はやてさんとは別の意味でドキドキしております。「なんだかんだで、楽しんでますねユンさん」

——ええ。最終的に誰も損をや傷なく終わるドッキリでしたら大歓迎です。

「ユンさんの意外な一面を知った気がします——それでは、ぼち……と」

『どっかくん♪』

「うおう!? 音声データ!?!」

——やっぱり、テンションが高いようですね。

「なんなんやろうなこのテンション?」

『本日は、地球の日本時間において六月四日です!』

「……あ」

——?

『そんなワケで、せくの……』

はやてちゃん。

お誕生日おめでとう!

——あら。おめでとうございます。

「うあ。なんやこれ……え?」

——なのはさん以外のお声がありましたけど、お友達ですか?

「え? あ? はい……えっと、執務官のフェイトちゃんと、故郷の友達のアリサちゃん、すずかちゃんの声やと思うんですけど……」

えっと……ドッキリ系の身構えしたらとんだサプライズで、サプライズ過ぎて、どうしてよいやら……

う、うれしいんやけど、なんや——メツチャ嬉しいのに、素直に喜べへん……」

——もう少し、可愛いらしく困惑しております、はやてさんとお話したかったのですが、今日はもうお別れのお時間みたいなようです。

「な、なんや。最後がこんなんでほんと、申し訳あらへんです」

——いえいえ。その驚き方、とっても可愛らしくて素敵ですよ。

「……お、おおきにでしゅうう……」

——それでは、本日は一時間のお付き合ひ、はやてさんありがとうございました。ごうございました。

「いやいやいや、こちらこそお呼び頂ありがとうございます。ごうございました」

——この時間のお相手はユン・ハーキライトと、

「八神はやてでした」

——それではまた来週、この時間にお会いしましょう。では。

克蘭ナガン放送——Oh！ デブニング

——爆発とかはしないの？

「しませんて」

（あはははは）

——なんだ、ただの誕生日メツセージかよー。

「いやでもほらー！ はやてちゃんの身構えてたのに、『お誕生日メツセージ』が来て、嬉しいのに、身構えてたはやてちゃんからすると感じる、

やられた感みたいなのヤツのせいで素直に喜べない、あの感じ……ペルソナコレクション・テンフェイスに使えそうじゃないですか？」

——それ聞いて思い出したよ。コーナー。二時間しゃべって結局、一つもやってねーのな。

「そう言えば!?!」

——そして、時間がねえ！

「え?」

——そんなワケで今日のお相手は、微笑みの豚スマイリー・ポークシノ・ケカオンと、時空管理局の白い悪魔こと……

「え? ちょ……ッ! 何そのフリ!? 私そんなじゃ……いや、えつと。あ! 高町なのはでした!!」

——じゃあ、来週もよろしくー!

「いつも聴いてる通りんだけど本当に現場レベルでグダグダのまま終わるんですねこの番組!」

(あははははははははは！)

【Takamachi Nanoha no Itazura Si
ro Usagi — closed.】

おまけのおまけ。

「フェイトママ？ どこ行くの？」

「知らなかったんだ私……」

「え？」

「なのはが……まさか、あんなに腐葉土を恋しがってただなんて！」

「いや、ちょ……っ！ フェイトママ!？」

「ごめんねヴィヴィオ。 ちよつと腐葉土買いに、園芸店に行ってくる
!!」

「なんて硬い決意ツ!? って、そうじゃなくって、あれはお話の……
あ、もういない……」

そうして、なのはが家に戻ってくると腐葉土の袋を抱きしめて、
フェイトがリビングで泣いていたとかいないとか。

【omake — closed.】